

# 太田城水攻め研究の現在

紀州研フィールドミュージアム叢書①

『中世終焉 — 秀吉の太田城水攻め — 』刊行 8 年の総括

宇民 正・海津 一郎・新谷 和之・弓倉 弘年

## 序

「秀吉の太田城水攻めを考える」という副題のついた著書『中世終焉』（清文堂）が和歌山大学フィールドミュージアム叢書の嚆矢として同大・紀州経済史文化史研究所（以下紀州研と略す）から刊行されたのは、2008年5月のことだった。前年2007年7月1日に地元の向陽高校を会場にして「太田城水攻めと出水堤防—フィールドミュージアム雑賀惣国」と題した公開シンポジウムを実施して、5人のパネラーが100人を超える聴衆の前で公開論争を行ったのである。紀州研は同じ年に博物館相当施設に登録されており、大学と地域社会をつなぐ知の回廊になる構想・「大学博物館HUB」を打ち出していた。太田城シンポは、そのオープニングセレモニーだったのである。

私が「太田城水攻め」を数ある紀州地域史のなかから最初に取り上げた理由は、県内において大きな論争地となっていること、とりわけ憶測にもとづく額田雅裕・水田義一両氏ら地理学者による虚構説の論じ方に問題が大きいこと<sup>(1)</sup>、不世出の民衆史家である西岡虎之助の処女論文の地であることが発見されたこと〔西岡 2008〕、などが挙げられる。考察に当たっては、なによりも基礎的な素材調査を優先して、現存唯一の水攻め堤坊である出水堤防を分析対象にして、科学的な土木工学・土質工学の工学調査を実施し、その上で従来の考古学の研究成果を再検討した。この基礎データを基にして、水攻めの規模や仕組み、現実には発生した歴史的事実（横堤の役割、破堤の過程）を確定していった。その間、水攻め堤が内側から（つまり太田集落側から）掘上げ積まれたこと、出水での破堤と横堤の決壊とに相関関係が認められること、最大の工学上の問題が（巨大堤防築堤の可否ではなく）持ちこたえるかという強度の問題のほうであること等が次々に明らかにされてきた。

『中世終焉』は、フィールドミュージアムの名にふさわしく、古文書・古記録はもちろん、遺構断面の実測図、米軍撮影の空中写真(ステレオ)、絵図や縁起絵など絵画史料、地域調査にもとづく小地名・水利慣行など現地情報を地図上に示した「史跡編 失われた中世をもとめての時空散歩」(pp195 - 208)が収録されている。まさに学際的な方法により、「天正13年4月」の真相に迫るという知的な冒険だった。それでもまだ十分にリアルに地域への認識が得られないため、大版フィールドミュージアムマップ「太田城」を作成して現地調査に携帯できる仕様とした(B2判のカラー地図)。これは大変好評を博して「紀州研フィールドミュージアム」の代名詞のようになって判を重ねて改良されて、雨に強い合成紙ユボを使うという発展をみた(表1)。改訂ごとに、岩本茉莉、湯峯愛、鎌田千春諸氏の卒業制作の成果が盛られて、版域の拡大や地籍図データの精度を挙げて行った。

そして、水攻めの仕組みをさらにわかりやすく説明したいということで、DVD版の和歌山大学フィールドミュージアム・ビデオライブラリの第1巻『秀吉の太田城水攻め 中世の自治から近世の平和へ』(30分)刊行に結実する。DVDの公開が、2009年であるから、FM地図の普及もふくめて驚くべきスピードで作業が進行しているのがわかる<sup>(2)</sup>。綿密な基礎作業の上に、大学博物館に拠る研究者と、地元の教員・学芸員をつなぐ「HUB」として紀州研が機能していたことがわかるだろう。このような関係は、和歌浦・雑賀崎・那智勝浦・紀南移民調査地などで再現されて今日の紀州研の研究蓄積につながっている〔海津 2010〕<sup>(3)</sup>。その評価は〔藤田 2013〕を参照。

表1 「雑賀の惣国 太田城編パンフレット」製作履歴(©中和印刷岡信宏)

初 版(平成 18 年度)	2007.03.30 納	1000 部	
第 2 刷(平成 19 年度)	2007.12.10 納	2000 部	合成紙ユボへ切り替え
第 3 刷(平成 20 年度)	2008.11.07 納	3000 部	〔湯峯 2009〕 清書図へ差替え
第 4 刷(平成 21 年度)	2010.02.19 納	2000 部	堤防の西側を鎌田千春成果加筆
第 5 刷(平成 22 年度)	2011.03.29 納	720 部	(年度またぎ分納)
(平成 23 年度)	2011.06.20 納	280 部	(年度またぎ完納)
製作合計		9000 部	

以上、太田城研究の本質が、豊かな史料群に立脚した学際研究であること、紀州研がそれを進める仕掛けを作ったことを指摘した。ここから、各研究分野ごとに、この8年の間にどのような研究の前進や成果普及があったのか否か、寄せられた批判も含めて総括する作業を実施してみたい。執筆者・協力者は当時の担当者を中心に行っているが、城郭史分野については新たに和歌山城整備企画課学芸員の新谷和之氏に加わっていただいた<sup>(4)</sup>。

## 一 工学(河川・土木)分野

### A 研究の前提

「考古学的な成果はない」「文書はすべて後世の二次史料・偽文書の可能性がある」など、地理学者による水攻め不在説(額田雅裕氏の太田城=小向説)で混迷を極めていた研究状況の視界を晴らしたのが宇民正氏の河川工学研究であったことは論をまたない。

「空前規模の水攻めなどできるわけがない」という虚構説の先入観に対して、海津研究室からの依頼をうけた宇民正研究室は、現存堤防を基にして科学的な根拠を重ねて水攻めの規模を明らかにしようとした。堤防建設のための土量とともに、宮井用水を用いた浸水過程を復元したのである。建設の可否、水入れの可否など問題にならない(可能である)事を実証した宇民氏は、むしろ堤防強度への疑問を強く感じていた(作るのはいいが保つのか)。これを解明すべく、土木工学・軽部大蔵氏への共同研究を呼びかけて再現実験に取り組み、破堤の時期について軽部より条件ごとの仮説が出された(水位の差)。史実の破堤は築堤より7日目であるから、軽部試算によれば水攻めの水位は6メートル強だったことになる。いずれも現存する出水堤防を科学分析するなかで導かれた結論であり、従来の不在説のような表層的な史料批判による操作とは違った。

宇民説が提起された当初、横堤は秀吉軍の築堤で、二段階で導水していた、という所見が示された(前宇民説)。水攻め虚構説を摺り込まれていた城郭史研究者は、これに大きな衝撃をうけて、手放して評価した。そのため、宇民説が修正されて以後も、この前宇民説が影響を残すことになった。2007年の公開シンポジウムの過程で、宇民氏は地形勾配ベクトルによる太田一帯の「流

線」「発散」水利構造を提起して、横堤を太田衆のつくった「輪中堤防」であることを解明し、『中世終焉』をまとめるに際して1章を割いて詳細に論じた(pp62～70)。徹底的な自己批判によって、研究のグレードを飛躍的に上げるという学問研究の良識と厳格さを示したもののだが、この修正宇民説は十分に普及していないようである。当初のインパクトが強かったためか、城郭史研究者を中心に今も前宇民説を用いた説明が散見している。この点は問題であるので、現在20メートル格子(横206個・縦121個)で算出している地形標高(人工工作物・植生などすべて排除した単純な地形)を、近年一般化した格段に高い精度で実施して確定してはどうか。現在、和歌山市よりデータは入手済みで、工学実験のための数値入力の手配が進められている。以下、現時点での補充検討について示したい。

## B 太田城問題の補充検討について

### ア. DEM(数値標高モデル)による検討

#### (1) DEMデータの精度

5m間隔の標高データ(研究会此松提供)を解析してみると地形に人工的かつ幾何学的なパターンが出て、データが自然でない(異常である)ことを示している。調べてみるとこのデータの一部は10m間隔標高データから内挿して作成されており、上記パターンはそれによると思われる。そのため、京大防災研究所に依頼し、10m間隔の地形標高データを別途得たので、これにより解析を実施する。

#### (2) どのような解析をするか

α) 従来精度のよくないデータで実施してきた検討や計算をあらためて精度を上げて実施。

○堤防の体積や長さ。

○貯水量および貯水面積の経時変化。

○<横堤は、太田城の輪中堤としてもともと設けられていた>という仮説についての検討。地形勾配ベクトルの流線・発散の大きな所・発散の小さな所などを図化する。

β) 堤防の位置についてDEMによる微地形分析から情報は得られないだろう

か。

○地形勾配ベクトルの発散が大きな所。

○地形標高のラプラシアンで局所的な凹地や凸地が識別できる。

○地形標高データ値をスムージングして、地形の特徴を明らかにする。

イ．横堤についての検討

(1)土木工学の面から、＜横堤は水攻め以前にすでに設置されていた。それは太田城域を水害から防御するため＞という仮説を実証しようとした。今後は、これまでの検討をDEMを用いてもう少し精度を上げたものにしたい。……上述ア(2)

(2)横堤について、土木工学以外の分野からも検討してほしい。とくに以下のことを考慮すると横堤は軍事的施設でもあったと言えないか。

○横堤以外の堤は太田城から適当な距離をおいて設置されていた。一方、横堤は太田城域にほとんど張り付くような形で設置されている。

○横堤の上には見張り台あるいは狼煙台が設置されていた。

○横堤と2つの導流堤に囲まれた区域が水没したとき、太田側からそこへ船を乗り出して戦いを挑んでいる。

ウ．額田説の批判を、地形特性を可視化するとか数量化することにより、一層明瞭にすることができないか。

エ．鉄砲の殺傷能力と堤防建造方針の関連

第1に、秀吉が干殺し方針から水攻め方針に変更した理由、第2に堤防の配置と形状、建造方法、などについて、鉄砲の殺傷能力との関連で分析できないだろうか。これについては「中世終焉」の出版後に和歌山市立博物館太田宏一学芸員から助言を得た。本文末に引用する<sup>(5)</sup>。

オ．紀ノ川からの取水の方法に関する検討

この件は重要だが、調査の方法についてさらに検討したいので、隣接分野で手法や資料を調べてほしい。

## 二 考古学分野の太田城

『中世終焉』では、北野隆亮氏が埋蔵文化財包蔵地としての「太田城跡」を議論していたが、紀州研サイドからの強い要望をうけて、遺構・遺物分布

にもとづいて図1の太田城跡推定復元図を明示した〔北野 2008〕。その範囲は地籍図の「城跡」<sup>じょうせき</sup>を中心としつつも、西側に拡張して、北を二重堀にするなど、戦国期の環濠集落の発展した中世都市の景観であった。これは発掘調査の成果にもとづく初めての太田城の仮説であり、大きな影響力をもつことになる<sup>(6)</sup>。この北野復元図は、フィールドミュージアム地図の第3版改訂(表1参照)にいち早く反映したため、またたくまに広まっていった。

そして、2015年に行政発掘により太田城北側の大堀が検出され、それを踏まえて環濠集落プランの一部が改訂された(図2)〔北野 2015〕。北野氏はさらに、国際的な視点から太田城籠城の意義を問うべく、紀州惣国勢力(雑賀太田・海南など諸国)と信長・秀吉軍のもちいる軍事装備の差を科学分析した〔北野 2013・2015〕。和歌山市に働きかけて鉄砲玉の鉛同位体解析を別府大学平尾良光研究室に依頼し、つい最近、長篠合戦の鉄砲玉21球が日本産鉛70%以



図1 太田城跡推定復元図(●印は環濠検出地点・数字は調査回数)



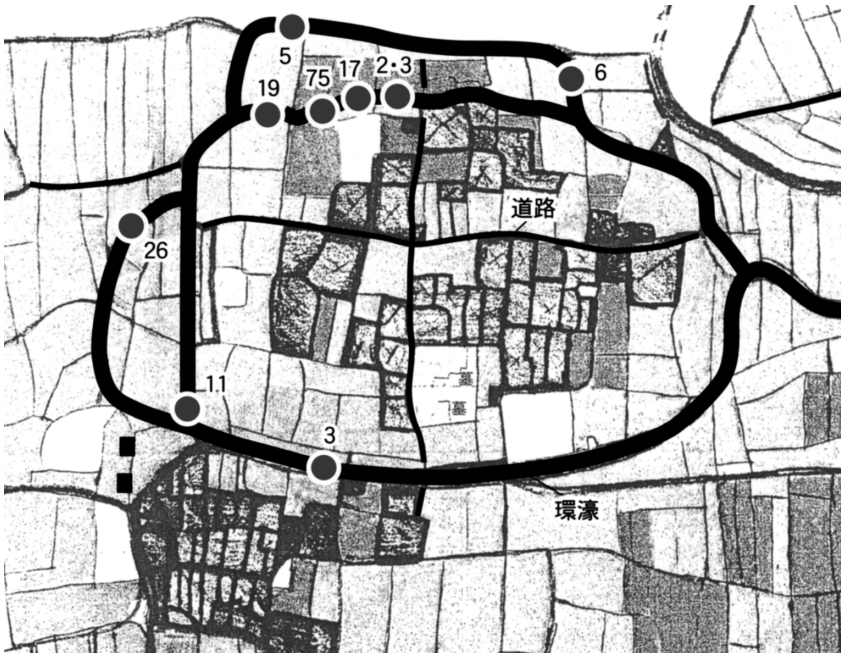


図2 太田城跡の環濠復元図(●印は環濠検出地点・数字は調査次数)

上に対して、和歌山市の鉄砲玉13球は70%が外国産(50%がタイのソント鉱山産出)であること、紀州戦場が東アジア産の鉛を大量輸入する地帯だったことが解明されたのである〔平尾ほか 2015〕。鉛同位体解析はもっとも注目される科学分析であるが、それにいち早く射程に入れて成果を出した和歌山市の姿勢に賛意を表したい。

太田城研究で試みられた学際的研究方法が、北野氏の考古学研究によって着実に広められていった成果と言えるだろう(北野説を簡潔に知るコラム記事として〔北野 2016〕参照)。一方、出水堤防については、その後も周辺地区での宅地造成が進み、史跡指定・活用の目途はたっていない状況である。

### 三 城郭史の太田城

ここでは、城郭史の立場から、海津一郎編『中世終焉』（清文堂出版、2008年）以降の太田城をめぐる研究動向を概観し、その成果と課題をまとめる。

従来、太田城については水攻めの規模やその実否が争点となり、城としての実態は明らかではなかった。そのようななか、北野隆亮氏は過去の発掘調査成果や地籍図をもとに、太田城の空間構造を復元した。それによると、太田城は東西約450m、南北約350mの環濠集落で、東西・南北に道路が貫通し、中世都市の様相を呈していたという〔北野 2008〕。北野氏は、「総光寺由来并太田城水責図」（惣光寺蔵）などからうかがえる近世的な城のイメージを排し、中世の村が城塞化したものとして太田城を位置づけた。研究史上の画期となる重要な成果といえよう。

藤岡英礼氏は、北野氏が想定した環濠のラインは北側を除いて集落に接しておらず、集落を囲郭する環濠とはいいい切れないとした。また、直線道は集落形成に一定の計画性があれば発生するとし、都市と評価することに疑問を呈した〔藤岡 2009〕。新谷和之は、北野氏の復原案に対して、西側の環濠は地籍図でも発掘調査でも確認できず、「環濠」として閉じていたかどうか不明であるとした。その上で、これらの溝は周囲の田地を潤す用水であり、防御施設として構築されたか否か検討を要すると述べた〔新谷 2013〕。

こうした批判は、太田城を環濠集落とする北野説の骨子を否定するものではない。北野氏は、中世の遺構や遺物の分布も踏まえて環濠ラインを推定しており、城の範囲が近世の集落域よりも広がる可能性はある。また、用水が防御施設を兼ねるケースもあり、二者択一で論じるべきではなかろう。

環濠の範囲や周囲の用水との関わりについては、さらに検証が進んでいる。大木要氏は、太田・黒田遺跡第11次調査で検出された溝を太田城の西側の環濠と評価した。第26次調査でみつかった西側の溝は、排水用の水路ではないかとした。ただし、第11次調査の溝のさらに西側で中世後期の遺物が出土していることから、北野復原案の西端のラインについては否定していない〔大木 2014〕。また、平成25年の第75次調査では、城の北側で幅約10m、深さ約2mの溝が検出された。近年の北野氏の復原案では、これらの成果を反映して、西側にも二重の環濠を想定している〔北野 2015a・2015b〕。本案が現時点で



の到達点といえるが、西の外側の環濠については比定の根拠がなお弱く、今後の調査の進展を期待したい。

北野氏が太田を都市と評価する点は、藤岡氏と同様に違和感をもつ。空間配置の計画性や出土遺物の質・量、顕著な屋敷遺構の存在から、一般の集落とは異なる場であったと理解しているのだろうが、それがなぜ都市といえるのか、十分な説明がなされていない。論者によってイメージの異なる「都市」という概念をもち出すよりも、太田がいかなる意味で特殊なのかを、和歌山平野の城館や集落遺跡との比較を通じて明らかにすることが重要であろう。

新谷は、雑賀の人々が太田に籠もるまでの経緯を同時代史料を中心にたどり、太田に籠もった人々の多くは秀吉に反抗する意志をもっていなかったと論じた。そして、河川や用水に守られた太田は、有事に周囲の人々が身を守るために集まる場であったと考えた〔新谷 2013〕。白石博則氏は、『紀伊続風土記』や「佐武伊賀勤書」の記載をもとに、天正13年(1585)以前に太田が地域の紛争に関わって城塞化されたと想定している〔白石 2013〕。発掘調査でみつかった溝も、天正13年以前から存在した可能性は否定できない。紀ノ川流域の集落の展開のなかで、太田が城となったことの意味を捉えなおす必要がある〔新谷 2015〕。

さらに、和歌山城郭調査研究会が和歌山市域の城館の悉皆調査を行い、いわゆる雑賀衆の城の実態が明らかになりつつある(『和歌山城郭研究』12・13)。それによると、和歌山平野では平地城館が比較的多くみられるが、太田城のように集落をまるごと環濠で囲郭するようなケースは確認できない。雑賀衆の城づくりにおいて、環濠集落は決して一般的なあり方ではなかった。それだけに、太田が中世後期に環濠集落となった背景や要因はなお追求されるべきであろう。

以上のように、北野氏の研究により、太田城の空間構造を具体的に論じることができるようになった。今後は、この復原プランの是非を詳細に検証するとともに、こうした環濠集落のあり方を紀伊国や畿内近国のなかで位置づけ、平地城館としての特殊性や普遍性をあぶり出すことが必要である。そうすることで、城郭史の立場から雑賀衆の実像に迫ることが可能になると考える。

## 四 歴史学の分野

### A 国家史・民衆史

雑賀衆については、あいかわらず大名権力に劣る不統一未組織の烏合の衆という通俗的な一揆理解・秀吉仕置き賛美と（〔寺西 2008〕など）、その反対に、したたかな最強軍団とする地域自慢の判官鼻眞理解とが、識者から垂れ流されている。その一方で、戦国～統一政権を海域世界史の視点から読み解くという中世史研究の主流と共鳴して、「おいなる共和国」「海賊島（イリヤ・ドス・ラドロイス）」と言われた紀州惣国の実態を探る研究も現れている。雑賀衆・根来衆（一部熊野志摩海賊）が、嘉請倭寇集団の日本本州支部の拠点を構成して、そのネットワークにもとづき鉄砲や航海術など先端諸技術を輸入しているという事態がわかってきた〔村井 2016〕。私が以前、中世都市根来寺をこのような倭寇文化圏の首都と論じたのも、このような研究動向に拍車をかけるためである〔海津 2014・2015〕。太田城水攻めは、このような国内の異国の滅亡、すなわち本州における日本国の確立を意味するシンボルである。このような広やかな視野から意義付けることが不可欠である。すでに、考古学の分野で、鉛同位体元素測定をしているのは、このような倭寇文化圏の実態をさぐるためである（二参照）。

### B 『中世終焉』以降の豊臣政権研究と紀伊

私に与えられたのは、『中世終焉』上梓以降における、豊臣（羽柴）秀吉の紀州攻めの研究動向である。『中世終焉』の成果は、その後の豊臣政権研究にどのような影響を与えたのであろうか。

たとえば、2014年に刊行された『岩波講座日本歴史第一〇巻近世一』では、「豊臣政権論」（中野等）・「兵農分離と石高制」（牧原成征）と、『中世終焉』と関係がありそうな論考が二本掲載されているが、いずれも触れられていない。それどころか、高校日本史の教科書である現行過程版『詳説日本史』では、図版ではあるが「紀伊平定」の記載が抹消されている。あくまでも私見に過ぎないが、豊臣政権論の中で、紀伊平定の重要性が低下していると言っても過言ではないだろう。

太田城水攻めの後に、豊臣政権として初めての刀狩が行われたことは、周

知の事実であり、中世と近世を分ける指標の一つとなっている。『中世終焉』では、単に太田城水攻めの規模を検証したのではなく、刀狩を含めた豊臣政権の政策と水攻めについて検討を加えている。筆者は、太田城水攻めは、刀狩に止まらず、秀吉の関白就任や宗教政策に与えた影響が大きいと考えており、過小評価できない出来事であると考えている。ただ、豊臣政権の研究としては、個別大名の事例研究を除けば、惣無事論や秀次事件の研究が中心であり、紀州攻めや太田城水攻めは、重視されていない。

中世と近世を分ける指標の一つに、宗教勢力の政治介入が無くなることがある。その一つに織田信長と本願寺・一向一揆の対決があり、紀伊も大きく関わった事柄である。最近筆者も関わった『顕如』（金龍静・木越祐馨編）では、中世と近世の境目に関わって述べた論考がある。以下、太田城水攻めに通じると考えられる論考を紹介してみたい。

小谷利明氏は「勅命講和」で、阿弥陀如来以外の信仰を排除する真宗にとって、信長がさまざまな神仏に起請する誓紙提出をさせたことで、イデオロギー的にも本願寺に勝利したとされた。筆者は、秀吉が皇祖神を祀るとされる日前宮の前で、大規模な水攻めを実施して神威を実現したことは、関白就任の前に自らが天皇の権力を代行する者としてふさわしいことを示めそうとしたからに他ならないと考えている。宗教をどう扱うかは重要な問題であった。

草野顕之氏の「教如教団の形成と性格」は、顕如没後の本願寺教団に秀吉が介入したことを述べている。秀吉の命令で教如が隠遁したことは、本願寺教団が秀吉の宗教統制に従わざるを得なかったことを示している。これも太田城水攻め無くしては、できなかったことではないだろうか。

宗教勢力とどう対峙し、取り込んでいくかは、統一権力にとって避けては通れない問題であるが、単に武力で鎮圧すればよい問題でもない。秀吉の太田城水攻めとその後の籠城衆の赦免、及び高野山を戦わずして屈服させたことは、秀吉の宗教統制にとって重要な出来事であった。このように秀吉の紀州攻めは、関白就任につながる重大な問題であったと考えている。

## 結 観光や地域振興との関わりも踏まえて観光学の分野

研究の発端は、以上縷説した通り、日本史上いかなる世界史上の大きな転換点に位置する1585年(天正13・4・22)惣国滅亡を復権したいとの思いである。各分野の、純粋に学問的な動機にほかならない。教育の分野でいうなら、郷土の歴史家・西岡虎之助が挑んだ民衆史研究の方法を正しく継承したいという思いが加わるだろう<sup>(7)</sup>。

さらに、ここでは多くを触れえないが、地元の思いを挙げないわけにはいかない。太田孝会長(故人、2014年10月10日病没)を中心とする太田城士祭保存会の面々は、私たち研究者集団に対して「死んでも死にきれない」との思いを吐露した。非科学的な思い付きの「学説」(先述の水攻め不在説)が、地元の歴史に対する敬意と「誇り」を損なっていたのである。あくまで真実を追究するという前提であるが、私たちは地元の地域史料を駆使して研究を続けることができた(中には採用できないものももちろん多々あったが、近代の行政文書の写し群は非常に有効だった。これについては野田阿紀子氏の一連の分析がある)。

残念ながら、太田孝氏は水攻め堤防・太田城跡の指定を見る前に病没された。だが、その翌年には太田城慰霊祭が節目の430年記念ということもあり、子ども神輿を出して大々的に挙行された。そして、今年もまた、和歌山大学海津研究室や桐蔭高校弓倉弘年氏の協力もあり、子ども神輿が継続して行われた(写真参照)。市の商工会議所によって、郷土英雄である謎の女僧兵「摩仙名(尼)」のコスプレ大会も行われて、歴史を通じた観光と地域振興がはかられている<sup>(8)</sup>。初めて太田孝氏と邂逅した1990年代では考えられない状況である。真実の追及は地域を動かした、と感傷的に述べることを許されたい。稿を閉じるに当たり、一昨年病没の太田孝氏、昨年亡くなられた軽部大蔵氏ののご冥福を祈りたい。お二人なしには決してここまで来なかったのである。



註

- (1) 関西中心の学際的学会1617会の和歌山担当例会(2002年)において、この点を厳しく指摘されたことがもっとも大きなきっかけとなる〔和歌山地方史研究会2003〕。
- (2) このDVDは、大学サーバーを通じて、全国に配信できるようになっている。
- 前編 [http://lms.center.wakayama-u.ac.jp/moodle/stream/streamview.php?mid=CP\\_c25c57f78d319c1509b01c7571160929](http://lms.center.wakayama-u.ac.jp/moodle/stream/streamview.php?mid=CP_c25c57f78d319c1509b01c7571160929)
- 後編 [http://lms.center.wakayama-u.ac.jp/moodle/stream/streamview.php?mid=CP\\_bd82f3034f3c25bd924d69e0db160929](http://lms.center.wakayama-u.ac.jp/moodle/stream/streamview.php?mid=CP_bd82f3034f3c25bd924d69e0db160929)
- (3) フィールドミュージアム路線は、県教委との連携が途絶えることによって棚上げされ現在は否定されている〔海津 2013〕
- (4) 今回の執筆・協議スタッフは一新谷氏ひとりを除き―当時の調査団の参加者であり、その後も折に触れて太田城に集って議論している自称「太田籠城衆」である。『中世終焉』は城郭史のスタッフを欠いていた。出発点が出水堤防という治水・灌漑遺跡を起点としていたためであるが、一方杉山城問題等に象徴される表面観察(縄張り研究など)の方法に対する不審があったのも確かである。今回は、新進気鋭の若手研究者である和歌山城天守閣学芸員の新谷氏に依頼した。この部分については、2008年以後ではなく、城郭史の中の太田城を考えてほしいとお願いした。
- (5) 太田宏一氏の鉄砲射程に関する指摘については〔太田 2008〕に詳しい。必要部分を要約するなら、＜火縄銃は通常6～10匁の軍用筒で有効射程距離は約200mくらい(あくまで有効であって玉は5、600mはいく)、人を殺傷するくらいの距離。歴博の実験によれば、厚さ1mmの鉄板や3cmのひのき板は13mほどの距離であれば貫通する。しかし、太田城付近から出土する鉄砲玉は直径が1cmほどで、猟銃などによく使われる3匁5分玉。この細筒なら、射程距離はさらに短く100mの距離をおいて築堤したというのは、細筒の有効射程距離の限界に近い距離だという。雑賀衆はおそらく細筒を保有していたと考えられる＞となろうか。
- (6) 太田の環濠集落の在り方について、大和の環濠集落との比較から批判も行われた(藤岡 2009)。これまで無視されてきた紀州の歴史地理研究が、はじめて全国的な議論の俎上によって論争の起点となったのである。
- (7) 西岡虎之助という不世出の民衆史研究者が明治の時点で先鞭をつけた郷土教育の地域史叙述、学際的な研究へあくなき執心18歳の青年と不退転の反骨。われわれは、その不

屈の精神に今こそ学ばなければならないのだろう。西岡論文の稚拙さや先行研究に対する時代相を字句通りに読んで「郷土史」と嗤った論文は、やはりあまりにも浅薄といわざるをえない〔寺西 2008〕。

- (8)「観光」という点でいうなら、私たちは和歌山平野を雑賀とみる広義の雑賀概念を用いて、雑賀衆に太田党や土橋系(根来衆)を含めた用法で「雑賀惣国」を使用した(誤解を与える一向一揆も一切使用しないことにした)。あくまで「観光」アピールのための単純化と配慮であるが、郷土の人々には太田党を「雑賀衆」とみる認識はなじまない。(1585年太田城を侵攻した)鈴木孫一をもって(太田含む)「雑賀惣国」棟梁とする見方は違和感の強いものとなっていた。この先、本格的に観光をすすめる人々にとって、私たちが便宜的(ないし巨視的世界史的)に使用した「雑賀はひとつ」という理解は、歴史的な役割を終えつつあるのかもしれない。

## 参考文献

- 宇民 正・小林芳正 2013「弥陀次郎川の決壊原因と治水対策について」『月刊地球』vol. 35 No.8 <総特集：ゲリラ豪雨災害> 海洋出版株式会社
- 宇民 正 2015「わが国における治水のあり方をめぐって」日本科学者会議編『日本の科学者』Vol.50 No.10 <特集：激化する水災害> 本の泉社
- 大木 要 2014「総括」『太田・黒田遺跡 第13・19・20次発掘調査報告書』和歌山市
- 太田宏一 2008「雑賀衆の鉄砲射撃法について」『和歌山市立博物館研究紀要』22
- 海津一朗 2010「和歌山大学博物館の雑賀惣国復活プロジェクト」『日本史研究』573
- 海津一朗 2013「文化財と現代社会」(橋口定志編『中世社会への視角』高志書院)
- 海津一朗編 2014『中世都市根来寺と紀州惣国』同成社
- 海津一朗 2015「惣国首都の空間構成とネットワーク」『説話文学研究』50
- 北野隆亮 2008「太田城の考古学史と景観復元」『紀州経済史文化史研究所研究紀要』29
- 北野隆亮 2013「和歌山平野における円錐形鉛インゴットと鉛弾」『紀伊考古学研究』16
- 北野隆亮 2015「太田城跡の環濠復元」(『太田・黒田遺跡 第75次発掘調査報告書』和歌山市文化スポーツ財団2015)を引用
- 北野隆亮 2015「円形鉛インゴット」(『太田・黒田遺跡 第75次発掘調査報告書』和歌山市文化スポーツ財団2015)
- 北野隆亮 2015「太田城」中井均監修『図解 近畿の城郭』II、戎光祥出版



- 北野隆亮 2016「太田城の実像を探る」(前田正明編『特別展 戦乱の世から泰平の世へ』和歌山県立博物館)
- 草野顕之 2016「教如教団の形成と性格」(金龍静・木越祐馨編『顕如』宮帯出版)
- 小谷利明 2016「勅命講和」(金龍静・木越祐馨編『顕如』宮帯出版社)
- 白石博則 2013「太田城」『和歌山城郭研究』12
- 新谷和之 2013「天正一三年「太田城」の実像―関連史料と空間構造の分析を通じて―」『和歌山城郭研究』12
- 新谷和之 2015「太田城」仁木宏・福島克彦編『近畿の名城を歩く 大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館
- 武内善信 2016「雑賀衆と『石山合戦』」(金龍静・木越祐馨編『顕如』宮帯出版社)
- 寺西貞弘 2008「太田城水攻めの政治史的意義」『紀州経済史文化史研究所紀要』29
- 中野 等 2014「豊臣政権論」『岩波講座日本歴史第一〇巻近世一』
- 西岡虎之助 2008「太田城水攻について」『紀州経済史文化史研究所紀要』29
- 平尾良光・西田京平 2015「和歌山市で出土した鉄砲玉などに関する科学的調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報―平成24年度(2012年度)―』
- 藤岡英礼 2009「「太田城跡の考古学史と景観復元」へのコメント」『紀州古城館情報』229
- 藤田達生 2013「太田城水攻めと豊臣国分」『ヒストリア』240
- 牧原成征 2014「兵農分離と石高制」『岩波講座日本歴史第一〇巻近世一』
- 光成準治 2009「海津一朗編『中世終焉』」『史学雑誌』118-3
- 村井章介 2016『日本中世史④分裂から天下統一へ』岩波新書
- 弓倉弘年 2016「永禄・元亀の政局」(金龍静・木越祐馨編『顕如』宮帯出版社)
- 湯峯 愛 2009「地籍図による太田城水攻め堤防の復元」『和歌山地方史研究』56
- 和歌山市 1993『和歌山市埋蔵文化財調査年報3 平成4(1992)・平成5(1993)年度』
- 和歌山市都市整備公社 2009『太田・黒田遺跡 第59次発掘調査報告書』和歌山市都市整備公社発掘調査報告書2集
- 和歌山地方史研究会 2003「特集 雑賀・惣国の実体をさぐる」『和歌山地方史研究』46

## 執筆分担

- ・序、一A、二、四A、結 海津一朗    ・一B 宇民 正  
・三 新谷和之    ・四B 弓倉弘年

